

体 育 科

島 貫 由 郷
出 嶋 志津子
中 前 裕 佳

1 体育科における「よりよい未来を志向する子」

運動は生活に潤いや活力を与えてくれる。汗を流す爽快感や目標をもって仲間と打ち込む一体感、目標を成し遂げたときの達成感など、運動を通して経験できるものがある。また、運動やスポーツを行い、様々な国の人々や多様な人々と協働したり競い合ったりすることで、交流を深め、自らの生き方を育んでいくこともできる。しかし、子どもの生活環境、生活スタイルの変化に伴い、運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向がみられ、どの子どもも運動に親しむことが難しいことや基本的な体の使い方がうまくできない子どもがいることなど様々な課題をかかえている。

新学習指導要領において体育科では、「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力」の育成を重視している。そのために体育の見方・考え方である「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点からとらえ、自己の適正に応じた『する・みる・支える・知る』の多様なかかわり方と関連付ける」ことを授業に取り入れていくことが重要となる。

そこで本校体育科では、そのような資質・能力を育むために、子どもが各種の運動の特性を理解し、そのおもしろさにふれることで自ら目的意識をもって学習に取り組めるようにしていく。そして、その特性に応じた基本的な技能を身に付けるとともに、習得した技能を活用して課題を解決したり、学習したことを相手にわかりやすく伝えたりして、運動と多様なかかわり方ができるようにしていく。また、運動技能や運動経験には差があることが当然のことであり、そのような多様な学習集団が違いを乗り越えていくことの楽しさを感じられるようにすることをめざす。このような学習を行っていくことで、運動やスポーツとの多様なかかわり方を知り、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ子を育成できるであろう。

以上のことから、体育科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・ 運動の特性を理解し 目的意識をもって学び続ける子
- ・ 運動を試しながら 友達と思いや考えを伝え 共有し 運動やスポーツの特性に合わせた動きを考える子
- ・ 運動やスポーツの楽しさを自覚し 生涯にわたって運動やスポーツに親しむ子

2 体育科における未来へ生かす決める授業デザイン

体育科において、その運動に応じた基本的な技能及び知識を身に付け、運動が「わかった」「できた」という達成感や満足感を味わうことは、運動に主体的に取り組む上で欠かせないことである。そのために、単元の導入時に運動の特性を踏まえた子どもの実態に合う教材と出会わせ、子どもが「できた」という経験をすることで、「もっとやってみたい」という意欲を高め、「こんなことができるようになりたい」という目的意識をもつ（決める）ことができるようにする。目的が決まれば、達成するには何が必要か自分の課題を見つけることができ、運動を試しながらその課題を解決していくことができる。そして、課題が解決できたかをふり返り、また新たに課題を決めるという学習につながっていく。このような学習過程をくり返すことで、運動に主体的にかかわり、学び続けることができる。

子どもが課題を決めると、課題解決に向かって、様々な動きを試す。そして、試した動きの中から、運動の特性に応じた動きかどうかを考え、めざす動きを共有していく。そのようにして、全体で見つけた動きの中から、自分に適した動きはどれかを考えたり、試したりすること

で、自分の課題に適した動きを選択する（決める）ことができる。一人では一面的なものの考え方になり、自分の動きを把握できなかつたり、課題を解決できなかつたりするときもある。そのため友達と話し合う場や見合う場を設定し、思いや考えを伝え合わせる。そうすることで子どもは見方や考え方を広げ、自分に適した動きを選ぶことができる。

このような学習をくり返していく過程で、毎時間ふりかえりを行う。ふりかえりは、運動のおもしろさに対して自己の取り組みはどうであったか、他者とのかかわりはどうであったか、これからやってみたいことという三つの視点で行う。そうすると、何が得られて何が足りないのか考えることができ、課題を明確にし次の時間に臨むことができる。そして、ふりかえりをためていき、子どもがそのふりかえりをもとに省察を行う。省察を行い三つの視点について考え直すことで、自己の変容や成長に気付くことができる。ふりかえりや省察を行うときには「する・みる・支える・知る」の四つの運動とのかかわり方を学習の過程で経験したことを自覚させる。これらの経験を積み重ねていくことで運動への親しみが生まれる。こうして、体育科における「よりよい未来を志向する子」が育まれていく。

3 決める授業の手だて

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

子どもが教材と出会ったときに各種の運動の特性にふれ、「おもしろいな」「もっとやりたいな」と思うことができるか、少し先の自分を想像して「こんなことができるようになりたいな」という願いや目標をもつことができるかが重要になる。そのためには、教材との出会わせ方を工夫することが必要である。例えば、ルール・規則を簡易化したゲームにする。子どもの運動技能や経験には差があるため、全ての子どもが「自分にもできそうだ」「やってみたい」と意欲を高められるような教材を準備する。また、ねらっている動きを引き出せるような場を設定したり、今まで知らなかった運動の楽しみ方を示したりする。そうすることで、今までできなかったような運動や経験したことがないような運動ができ、意外な楽しさに気が付くこともあるだろう。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

子どもは夢中になれる運動と出会ったとき、「この動きはどうか」と動きを決め、試す。その試した動きの中から、運動の特性に合った動きを見つけることができるように、運動を行うポイントを提示し、よい動きを見つけ、共有していく。そして、その中から、課題に適した動きを行っている子どもを紹介し、なぜこの動きにしたのか、決めた根拠を明確にする。そうすると、友達の多様な考えにふれることができ、新しい動きを見つけたり、新たな視点をもったりして動きを決めることができるだろう。さらに、友達と動きを見合い、よい動きや不十分なところを考えたり伝え合ったりすることで、自分の動きをもう一度とらえ直すことができる。そのときに、考えや伝えることを共有できるように、運動の特性や大切な動きのポイントなど基礎知識を与えたり、見る視点を明らかにしたりする。

(3) 今までの学びをふりかえり 未来に役立てる「決める」

「する・みる・支える・知る」の四つの運動とのかかわり方を考えられるようにするために、四つのかかわり方を授業の中で経験させるようにする。そしてそれらのかかわり方を自覚させるために、よいかかわり方をしている瞬間をとらえて教師が価値付けて、ふりかえりや省察に生かせるようにする。

ふりかえりは毎時間の授業で設け、ふり返るときには運動領域や子どもの実態にあわせて三つの視点から選択しふり返らせる。また、授業後には運動のおもしろさをどれ程味わうことができたかを数直線や点数などでふり返らせる。そして省察するときには、これまでのふりかえりを見返し、自己の変容や成長を実感できるようにする。

このような学習の流れをくり返し、四つの運動のかかわり方から自分なりのかかわり方を決められるようにすることで、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ素地を育みたい。